

随筆

中国駐在記

山内 一志

1. はじめに

私は世界中で猛威を振るったCovid-19の真ただ中の2021年2月から、落ち着きを取り戻した2023年9月末までの約2年8か月にわたり中国江蘇省鎮江市にあるKYB Industrial Machinery (Zhenjiang) Ltd. (以下KIMZ) に単身で駐在した。

当時の中国ではゼロコロナ政策が敷かれており、海外からの中国入国者は例外なく合計28日の隔離措置を取っていた。その隔離を経て駐在員としての生活をスタートさせた。

2. 28日間の隔離生活

まずはじめに隔離生活について紹介する。

中国への渡航は、発着できる空港が限られていた影響で関西空港から南京空港までのフライトとなった。当時の関西空港の場内は、ほとんど人の気配はなく、一部の飲食店のみ開店している状態だったことを記憶している。飛行機へ搭乗後に周りを見れば、客室乗務員や一部の乗客は白い防護服を着用していたため、客室内はいつもと違う異様な雰囲気であった。

南京空港到着後は事前に申請していたPCR検査結果や健康状態の登録内容確認、PCR検査の受診など、空港を出発するまでかなりの時間を要した。また、どの隔離施設に案内されるか到着まで分からないためかなり不安であったが、まずまずのホテルの部屋に案内されたので安心した。

食事は朝、昼、夜と3食暖かい状態で提供された。とはいえ、中国特有の香辛料が苦手な私はほとんどのものを口にはできず、日本から持ち込んだインスタント食品やKIMZからの差し入れによって孤独な隔離生活に耐えることができた。

隔離期間中に春節(旧暦のお正月)を迎えた。その日の夕食は特別食として水餃子が提供された。おいしかったのだが私の胃にとっては重く、しばらく胃もたれが続いたのは良い思い出である。



写真1 隔離中の食事(春節の特別食)

3. 中国での生活

つぎに食生活について。

前述の通り中国の香辛料が苦手な私は、家の近所にある韓国料理や、鎮江市内にあり日本語が通じる本格的な日本式の焼鳥屋によく通っていた。そこで野球やサッカーを観ながら飲むビールは最高の楽しみ方であった。東京オリンピック、サッカーワールドカップ、WBCなどの日本中が熱狂していたであろうスポーツイベントを中国で楽しめたのは良かった。



写真2 日本式焼鳥屋での食事

中国では宅配サービスが進化しており、スマートフォンアプリで食事や日用品などをドアtoドアで

届けてくれる。基本的にインドア派な私にとっては大変うれしいサービスであったが、このサービス故、一度も家の外に出ない週末もあり、健康にはよくないサービスかもしれない。



写真3 宅配朝食



写真4 宅配のうなぎ丼

そして、中国での買い物事情について。

中国にはWechat（微信）と呼ばれる日本のLINEのような連絡アプリがある。このアプリは中国で生活するうえで必須のアプリの一つである。ほぼ全ての店での支払いはこのアプリで行っており、日本とは桁違いにキャッシュレスが浸透している。

よって、スマートフォンの充電残量はとても重要であり、置忘れなどには細心の注意が必要である。

しかしながらこの支払機能を使うにあたっては中国の銀行口座が必要であるため、口座を持たない海外からの訪問者は使用できないのが残念である。

通販アプリでは割高にはなるものの、日本で売られている食品も購入できるので、駐在期間中はとても助かった。

4. 中国での業務

中国に赴任してからの主な業務は、カヤバの主力製品のひとつでもある、20t～30tクラスの油圧シヨベルに使用される油圧シリンダのKCH(Kayaba Cylinder Highpressure)の生産ラインの工程改善

に関わる業務に従事していた。マザー工場である南工場の改善の横展開をはじめ、生産技術部の主管としてKIMZスタッフによる独自の改善のサポートをしていた。

KIMZスタッフの改善への意欲は非常に高く、改善の内容のレベルの高さやその達成までのスピードには、正直に言うとなついていくのが精いっぱい、我々駐在員も見習わなければならないと痛感した。

その中でも、赴任期間中に生産技術発表会でKIMZにとっては初めてとなる生産技術課のスタッフによる改善事例が発表できたことは、私にとって大変誇りに思える出来事の一つとなった。

なお、発表は通訳を使わずにすべて日本語で発表した。KIMZには通訳以外のスタッフであっても日本語が使えるスタッフが多く在籍していたため、私の中国語のレベルが全く向上することはなかった。

5. 一年ぶりの一時帰国

2022年2月末にコロナワクチン接種もかねて一年ぶりに日本へ一時帰国をした。当時の日本政府の海外からの入国者に対するの主な措置は、

- ・ 出国前のPCR検査の陰性証明の提出
- ・ 公共交通機関での移動禁止
- ・ 自宅（宿泊施設）での1週間の健康観察

などが義務付けられていた。

成田空港に到着した私は、自宅のある岐阜県まで約440Kmの道のりのレンタカー移動を余儀なくされた。運転はもともと好きなほうなので問題なかったのだが、

- ・ 一年ぶりの運転であること
- ・ 中国とは車線が左右逆である
- ・ 初めて首都高を走る

ことから多少の不安があったが、はやる気持ちを抑えつつ、普段以上に慎重な運転を心がけたことで、約7時間かけて無事帰宅できた。

一年ぶりに家族と再会できた私は、家族との時間を大切にしたい。その中でも野球観戦やテーマパークへ遊びに行ったり、長男が参加している野球のスポーツ少年団活動とともに汗を流すなど、駐在中にはできないことを家族とともに楽しむことができた。

一時帰国中は基本的にはテレワークにて勤務をしていたが、岐阜南工場や東工場に顔を出し、約1年ぶりに再会する同僚へのあいさつや、最新の改善活動などの情報収集に注力した。

そんな楽しい時間も終わりを告げる時間がやってきた。コロナワクチン接種も完了し、中国へ戻る時間を迎えることとなった。

次の一時帰国は1年以上先となることが分かっ



写真5 ナゴヤドームでの野球観戦

ていたので、別れの際にはさびしい気持ちが込み上げてきたことは言うまでもないが、日本に家族を残してきた海外駐在員として、今まで以上に業務に邁進することを深く心に刻んだことはこれから先も忘れないだろう。

6. 中国旅行

話は変わり、中国駐在期間中に行くことができた旅行について記す。ゼロコロナ政策も終わり、コロナ禍が落ち着いた2023年6月に兵馬俑で有名な陝西省の西安、9月には万里の長城がある山西省の大同へ行くことができた。

紙面の都合上、この随筆では西安旅行について紹介する。中国の6月は端午節と呼ばれる連休があり、それを利用してKIMZスタッフ達と一緒に3泊4日の旅行に出掛けることができた。コロナの影響もあってKIMZのある江蘇省を出たことはなく、私の知らない中国を知ることができるということで、とても興奮したことを覚えている。

さすがは中国である。国内移動でも飛行機は当たり前で、高速鉄道(日本でいう新幹線のこと)で行っても6時間以上の移動であり、大陸の広さを感じた。

西安到着後は、まず地元の食事をとったが、鎮江とは違った味付けと感じた。この地域では米よりも小麦がよく食されているようで、小麦を使ったパンや麺などの汁物の食堂をよく見かけた。

初日は市内観光しながら食べ歩きを楽しんだ。夜の街のライトアップは煌びやかであり、さすが中国と改めて実感した。

2日目は、タクシーに乗って兵馬俑のある博物館まで移動した。正直なところ、兵馬俑という存在は学生時代に教科書で見た程度で、石像がたくさん並



写真6 西安のライトアップ

んでいるという印象しかなかったが、行ったことで初めて秦の始皇帝のお墓だと認識した。もともと中国の歴史には詳しくなかったのだが、中国をもっと知るためにも三国志を読み漁ろうと思った。



写真7 兵馬俑

連休ということもあり、中はたくさんの観光客でにぎわっており、前に進むのも大変な状況ではあったが、中国の歴史に触れられてよかったと思う。

夕食は、陝西省で有名な麺料理、漢字の画数として中国でも最多の56画もある『饅頭』を食べることができた。『ジャンジャンメン』と発音するが、中国人でも読めるけど書けない代表的な漢字と思われる。

日本でいう汁なし混ぜそば風ではあるが、見た目よりも辛くなく、幅広の麺に唐辛子と山椒と甘辛いたれが良く絡み、非常においしかった。

3日目は、華山(hua shan)と呼ばれる5A級観光地に指定されている中国で有名な山に登った。登ったといっても、ロープウェイを利用したのは言うまでもない。さすがは中国の五名山とされている山である。天候にも恵まれ山から見える景色は美しく、今でも心に刻まれている。

しかし、高所が苦手な私は、山の稜線を歩くのも怖く、撮影ポイントでは柵が設置されていなかった



写真8 ビャンビャン麺

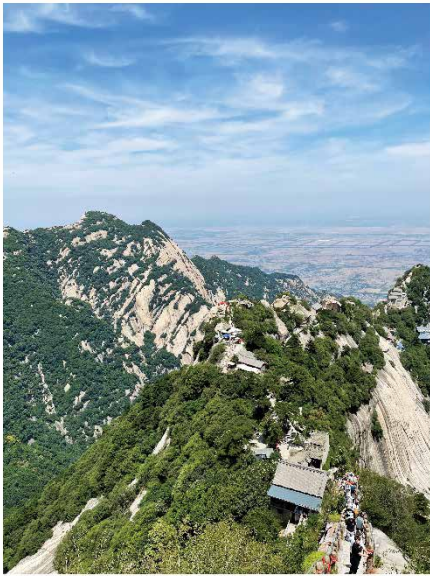


写真9 華山からの景色

ため足がすくんでしまったのは苦い思い出である。
最終日である4日目には、洛陽にあるユネスコ世界遺産に登録されている龍門石窟へ足を運んだ。石窟とは岩の壁に仏像が彫られている壁であり、10mを超える大型の仏像や、洞窟の中に仏像が彫られて

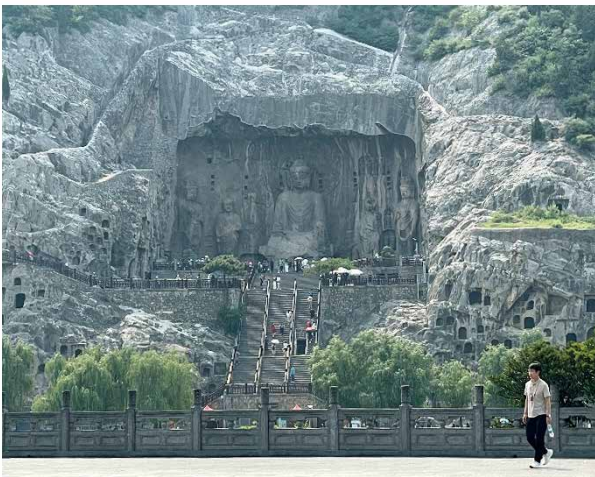


写真10 龍門石窟

いたり、圧巻の光景であった。1500年前には完成していたようで、現代まで残っているとは驚きである。

7. おわりに

これから先の人生でおそらく経験することはないであろう28日間隔離生活から始まった駐在員生活は、初めは不安がとても大きかったが、2年8か月という期間も過ぎてしまえばあっという間であった。

また、駐在中にはたくさんの方々から中国での業務や生活のサポートをしていただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

帰任直前には何度も壮行会を開催していただき感謝申し上げます。みんなと杯を交わした中国の定番のお酒である『白酒』の味は二度と忘れることはないでしょう。



写真11 生産技術部スタッフとの食事会



写真12 生産部スタッフとの食事会

最後に、今回の中国駐在は家族は帯同せず単身の駐在であった。今では小学生になり一人であることが増えているが、駐在した当時のまだまだ手のかかる幼稚園の年長クラスと、年少クラスのわんぱく真っ盛りの男の子二人を日本に残してきた。

そんな彼らの育児を一人で対応していただいた妻には感謝を申し上げます。

また、毎朝のビデオ通話は欠かさず行ってはいたものの、父親不在でさびしい気持ちを我慢してくれた息子たちにも感謝申し上げます。

著者



山内 一志

2005年入社. 岐阜南工場管理部(原
価企画). 岐阜南工場生産技術課,
KIMZ (HC) 駐在を経て現職.